

＜書 評＞

山本 亨（日本大学教授・麻酔科）

若杉文吉（関東通信病院ペインクリニック科部長）

図解 痛みの治療 第2版

神経ブロック療法を中心として

石田 肇（日本医科大学教授・理学診療科）

この度、斯界の第一人者である山本亨先生と若杉文吉先生の名著「図解痛みの治療」の第2版が、上梓され世に送られることとなったことは、誠に御同慶にたえない。

本書の第一版は1971年に出版されたのであるから、15年間という息の長いベストセラーとしての役割を果たして来たことになる。

山本先生の人柄は頭脳明晰で機智に富み、物事のポイントをとらえるのにたくみであるのに対し、若杉先生は独創的創意工夫の人、実践の人であり、両先生の長所がうまく結びついてこのような簡にして要を得た名著が出来あがったものと思う。第2版は全体として見出しも大きくなり一層読みやすくなったというのが

第一印象である。

内容に関しても最新の智識、情報を出来るだけ多く、かつ分かりやすく取り入れ、実質20頁以上の増加になったが、本書が実際の手頃な成書である体裁は失っていない。

最新の知見として、基礎的な痛みの伝達の機構とそのコントロール機構について言及し、下降性の痛みの抑制経路や発痛物質、エンドルフィン、セロトニン、Substance P などもふれている。疼痛患者に行われる脳神経外科的方法として、コルドトミーがしばしば行われるが、これで完全な鎮痛作用の起らないのは、その下降性の抑制経路まで遮断するためと述べている。ペインクリニックが独立し、本邦でその理解と需要

が高まり、従来手術時の麻酔の一つとしてのみ考えられていた手技が、両先生の努力と本書の普及により、痛みの研究の足がかりとなり、ペインクリニック学会にまで発展したことは喜ばしいことである。

第2版では、注射器や針の持ち方など実際に重要なのに無視され勝ちな項目をふやし、また、手技としては脳神経叢のブロックや胸部交感神経節ブロックの新しい方法が図説されている。

本書の何よりの特徴は、実際の臨床の場において直に應用できると、両先生の人柄のあふれたユニークな図による明解な解説にあると思う。

本書の価値は利用される読者により決められるものと思うが、名著の一つとして敢て江湖の諸賢におすすめる次第であり、座右の書として折にふれてひもといて見る価値のあるものと思う。

（B 5，頁 264，図 21，写真 19，色図 123，表 17，1985，¥ 5,500 千300 医学書院 刊）